

日露戦争の世界史的意義について教えてください。

日露戦争は日本がロシアに勝利したという印象を世界的につくりだして、終わった。陸軍の戦いでは、旅順は陥落したが、日本軍側も多大な人的犠牲を出した。最後の奉天の会戦もロシア軍の退却で終わったが、ロシア軍の戦死者8895人、負傷者5万1002人に対して日本軍の戦死者は1万6553人、負傷者5万3475人であったから、勝負がついたといえるものではなかった。しかし、これに比較して、日本海海戦は東郷平八郎提督率いる日本海軍がロシア艦隊に対して完勝したことは全世界の人々に強烈な印象を与えた世界史的な大事件であった。

ロシアの大艦隊は撃沈19隻、捕獲5隻、その他4隻、中立港へ逃げた6隻で、34隻を失い、ヴラジヴォストークに到達できたのは小巡洋艦1隻、駆逐艦2隻にすぎなかった。これに対して日本側の損害はわずかに水雷艇3隻であった。20世紀の艦隊間の戦闘はすでに前世紀末の平和会議でその残虐性が問題となり、爆発物の制限が提起されたのであるが、日本海海戦の結果は勝った日本海軍軍人をも慄然とさせるほど残酷なものであった。日本側の戦死者はわずか116人であったのに、ロシア側の戦死者は5045人に達したのである(クレスチャーニノフ『対馬海戦』2003年(Крестьянинов В. Я. Цусимское сражение: 14-15 мая 1905 г. СПб.: Остров, 2003.))。これは戦争というより、大量虐殺に等しい。

アジアの小強国が欧州の大強国に勝利したという印象が、当時の世界に伝わったところ、欧州諸国の植民地であったアジアの諸民族、インド、エジプト、ヴェトナムの人々、さらにロシア帝国の支配下にあったポーランド、フィンランド、カフカースの諸民族には大きなよろこびを与えた。ただし、すべての被支配民族がよろこんだのではない。日本の侵略に

より亡国の非運に直面していた大韓帝国では、皇帝以下、少なくない人々が世界一周してくるロシア艦隊の到着をいまかいまかと待ちかまえていた。この人々にとって日本海海戦での日本海軍の勝利は絶望以外のなにものでもなかった。

日露戦争の世界史的な結果は、帝国主義時代の国際対立の構図の変化を大きく変え、のちの世界戦争の配役と舞台装置をつくりだしたということである。

19世紀半ばには、フランスとドイツが対立し、イギリスとロシアが対立していた。1891年の露仏同盟の成立により、ロシアがドイツ、オーストリア＝ハンガリーとの提携を抜け、フランスの同盟国になるに至り、変化が始まった。世紀の終わり、日本が清国に勝って、朝鮮の支配権を要求すると、極東に進出するロシアが日本の前に立ちはだかつて、日露の対立が高まるなかで、1902年に日英同盟が結ばれて、日露戦争に突入したのである。日露戦争で日本が優勢勝ちし、ロシアが日露協約を結んで、東アジアから退場すると、ヨーロッパでドイツ、オーストリア対ロシアの対立が浮かび上がることは不可避であった。04年英仏協商、07年英露協商が結ばれるに至る。かくして、英仏露日の協商国陣営と独塊伊の同盟国陣営の対立の構図が成立するのである。その結果は世界戦争の勃発、「世界戦争の時代」の始まりである。

日露戦争の世界史的な性格は、この戦争が総力戦の端緒をなしたということである。日露戦争は20世紀の「世界戦争の時代」の先駆として、新しい戦争の特徴を備えていた。それは総力戦ということである。戦場で交戦国の軍隊が戦争するだけでなく、銃後の国家が戦争のために国の政治力・外交力、国民の経済力・精神力といった総力を動員する戦争というこ

とであり、その総動員の成否が戦争の勝敗を決定するのである。日露戦争は、大国ロシアにとっては帝国の広大な領土の東の端で戦った戦争で、ツァーリも臣民もこれが総力戦だという意識はもたなかったが、小国日本にとっては、ほとんどすべての家から兵士が戦場におもむき、銃後も勝利のために一丸となることを求められた総力戦であった。大国クラブに入れるかどうかの国力の検定試験がなされる戦争だと多くの人が意識していた。

近代において戦争の勝敗は国家の運命に大きく影響し、敗戦国では大改革ないし深刻な内乱がおこるのが常であった。1853～56年のクリミア戦争で敗北したロシアでは57年に「大改革」が始まったし、70～71年の普仏戦争に敗北したフランスでは71年にパリ・コミューンの反乱がおこったのである。戦争が総力戦に近づくと、戦争の過程で相手国の総動員体制を解体させることが勝利のためにプラスだとして、相手国内部の反政府運動、革命運動を支援する工作をおこなう傾向が現れる。他方で、自国の革命を求める勢力は、自国が戦争で敗北すれば、政府が権威を失い、革命が促進されると考え、自国の敗戦を積極的に望む敗戦主義という革命戦略が現れた。まさにそのような動きが最初に認められるのは日露戦争のなかでのことである。日本の駐在武官明石元二郎大佐がフィンランドの独立運動家ツィリアクスと組んで、おこなった工作が名高い。ロシアの革命家の側では敗戦主義思想を表明したレーニンの論文、「旅順の陥落」が名高い。1905年の革命の発端をなした「血の日曜日」の労働者の一大請願行進を指導者の神父ガボンが決断したのは、旅順の陥落の報を聞いたあとだった。亡命革命家ニコライ・ラッセル(スジロフスキー)は日本海海戦のあとに日本にきて、陸軍省の許可を得て、日本に収容されているロシア軍人捕虜に革命工作を実施した。

ここから帰結する日露戦争の世界史的な意義は、日本の勝利がロシア帝国に大きな打撃を与え、第1次ロシア革命を招来したこと、他方で日本は帝国として力を得て、大韓帝国を侵略、保護国化、併合するに至ったことである。

日露戦争における日本陸軍の優勢、日本海軍の決定的な勝利はロシア帝国に大きな打撃を与え、その権威を奪い、軍隊の解体の開始を引きおこした。

1905年の革命は「血の日曜日」に始まり、日本海海戦のあとに最高潮に高まり、皇帝は十月詔書によって国会(ドゥーマ)開設を約束し、1906年憲法体制を受け入れざるをえなくなった。06年には日露戦争に参戦した軍人たちの改革意見書が多く出版された。連隊長として戦ったマルトウイノフ少将の意見書は、日本軍を激賞し、ロシアの国家、軍、社会体制を激しく糾弾した。「ロシア軍は全面的な、体系的な改造を必要としている」。ロシア革命の第2幕が到来することは必然であり、第一次世界大戦のさなかにロシアは帝政打倒の二月革命に向かうのである。その先には第3幕としての十月革命、そして社会主義革命、共産党国家体制の樹立が現れてくるのである。マルトウイノフはソヴィエト政府に協力する。

他方で、日本は日露戦争の優勢勝ちにより、帝国主義世界での大国の地位を確立した結果、1905年に戦争の目的であった大韓帝国の保護国化を実現した。さらに韓国に対する支配を強める過程で、日露戦争に反対し、非戦論をとなえた幸徳秋水、堺利彦ら、明治の社会主義者たちの運動に圧迫を加え、10年には大逆事件で幸徳らを逮捕、12名を処刑した。そのうえで、「併合してほしいという韓国皇帝の希望を受け入れ、併合する」という条約を結び、天皇の詔書で併合した。大韓帝国は存在しなくなり、植民地朝鮮となった。日本は文字通り大日本帝国となった。それからは、植民地朝鮮を足がかりに、満洲から中国へ侵略を拡大していくのである。中国での戦争が行き詰まると、朝鮮人を道連れにして、「大東亜戦争」に突き進んだ。その結末は、本土壊滅のなかの8月15日の降伏であった。

ロシアと日本という2国が20世紀の歴史のなかで、それぞれ独自の道を歩んでいったことには、日露戦争の結果があきらかに強く影響しているのである。その意味で日露戦争が世界史をつくったといえるだろう。(わだ・はるき/東京大学名誉教授)